



教皇様の聲

7

231号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済 ©1999

信仰を告白しよう

(教皇庁信徒評議会の
メンバーを迎えてのお話)

新たな聖霊降臨の恵みを体験する

「信徒:現代世界における信仰の証人」…これが皆さんの総会のテーマです。ここには生活プランの全てがあります。すなわち、言葉と行動で「信仰の証人」となること。キリスト紀元二千年代の門口に立つ今、信徒にとってこれこそ摂理的とも言うべき招きではないでしょうか。大聖年を目前に、全教会は主の前にへりくだって真剣に良心を糾明し、深い改心、キリスト信者としての成長、聖性と真理におけるキリストへの忠実を目指して旅を続けなければなりません。それは本物の信仰の証人となるための旅です。この良心の糾明には、今世紀の教会を特徴づける最大の出来事であった第二バチカン公会議の示した、信徒の尊厳と召命と使命についてのすばらしい教えをよく理解することをも加えるべきでしょう。

大聖年は全ての信徒にいくつもの根本的な問いを突きつけます。私は洗礼を受けてから何をしてきたか? 召命にどのように応えているだろう? 堅信を受けてからは? 聖霊の恩寵や賜物を実らせているだろうか? 毎日の暮らしの中に、いつもキリストがおられるだろうか? 私は役務の交わりの秘義である教会、創設者がそう望み、教会の生きた伝統がそれを実現している教会の、心底からの完全なメンバーだろうか? 私の決心は真理に忠実だろうか? 私の結婚生活、家庭生活、職業生活にはキリストの教えが染み渡っているか? 私の社会・政治活動は、福音の原則と教会の社会教説に基づいているか? もっと人間にふさわしい生き方を見つけるため、また福音の精神を大きく変わりつつある世界に根づかせるため、私には何が出来るか?

「第二の千年期の終わりにおける教会への、聖霊の卓越した贈り物」(『紀元二千年の到来』36番)である第二バチカン公会議と共に、私たちは新たな聖霊降臨の恩寵を体験しました。教会の使命への希望のしるしがたくさん生まれてきたことを忘れるわけには行きません。それらを大いに励まさなければな

りません。中でも私の念頭にあるのは、神の民の種々異なった召命の間に生き生きとした交わりを育ててきたカリスマが、再発見され評価を受けたことです。また、福音宣教への新たな熱意、キリスト教共同体への信徒の参加と共同責任の促進、信徒使徒職と社会奉仕の進展、などです。二千年代の始まりに当たり、これらのしるしは私たちを力づけ、信徒の成熟した実りあふれる「公現」を期待させてくれます。

しかし同時に、残念なことですが多くのキリスト信者が自らの洗礼の約束を忘れ、無関心に陥り、世俗化した社会に同調していることを見逃すわけには行きません。また、それぞれの教会共同体で積極的に活動しているものの、現代文化の相対主義に心ひかれ、洗礼を受けた全ての人を守るべき教会の教えと道徳を受け入れるのが困難になっている信者たちについても、言及せずにはおれません。

信徒がひるまず良心を探り、こうしたことを糾明してくれるよう望みます。紀元二千年の聖なる扉を、イエズス・キリストのまことの教えにそった真理と聖性に強められて通ることが出来るためです。「あなたたちは地の塩である。…世の光である。…人の前で光を輝かせよ。そうすれば、人はそのよい行ないを見て天にまします父をあがめるであろう。」(マテオ5・13~16) この世は、言葉と行ないでさらに力強くキリストを証する「新しい男性と女性」を必要としています。キリストは真理と幸福をあこがれ求める人間の心に、申し分なく完全な答えを与えてくれる唯一の方だからです。キリストこそは、人間にふさわしい文明を築くためのいしずえなのです。(…)

これから信徒には多くの仕事が残っている

第二バチカン公会議の教えと使徒的勧告『信徒の召命と使命』にそって、広大で実り多いカトリック信徒という分野にたずさわる教皇庁信徒評議会は、大聖年に新たな企てを計画しています。中でも最も重要なのは、二千年11月にローマで開催予定の信徒使徒職世界

大会でしょう。これは特に参加者にとっては聖年を祝う一大イベントとなるはずです。第二バチカン公会議以降、託身の聖年に至るまでの信徒の進展を総括するものとなるでしょう。ただし、過去の同じような数々の集会との連続性を考慮しなければなりません。今大会独自の特色と目的については、注意深く考える

べきでしょう。紀元二千年に予定されている大会が、主の恩寵の年の全ての出来事を糧に実りあるものとなり、新しい千年期の門口に人々のための使命と奉仕のあらゆる分野で、信徒を待ち受けている仕事を彼らに示してくれますように。(…)

(1999・3・1)

イエズスと御父の関係は独特

「父である神」シリーズ4

1 「イエズス・キリストの父である神を讃えよう。」(エフェソ1・3)パウロの言葉は、新約の中で一新された、御父についての知識を語る上で、かっこうの前置きです。ここでは神は三位一体の姿となってお現われになります。神の父性は、もはや被造物とのつながりを示すにとどまらず、神の内的生命を性格づける根本的なつながりを表わしています。つまり、父性は一般に神の特徴であると言うより、神の第一ペルソナの特性なのです。実に三位一体の秘義において、神はその存在そのものが御父です。父と等しく、また「御父と御子から生じる」聖霊において父とつながる御方・みことばを、永遠から生じられる御父です。みことばは世を贖うため人となり、自らを私たち人間と結びつけて、永遠から有しておられた子としての生命に私たちを導き入れてくださいました。福音史家ヨハネによれば、「その方を受け入れた人々…そのみ名を信じる全ての人たちには…神の子となれる力を授けた。」(ヨハネ1・12)

2 イエズスの経験をもとに、御父の姿が啓示されました。イエズスが御父とのつながりを全く独自の形で経験していたことは、その言葉と態度から明らかです。福音書を見れば、イエズスが「ご自分が子であることと、弟子たちの場合のそれとを」区別しておられたことがわかります。『あなたたちはこう祈るがよい、〈…われらの父よ〉』(マテオ6・9)と命じられた時の他は〈私たちの父〉とは言わず、〈私の父でありあなたたちの父〉という言い方でその違いを強調された。(カトリック教会のカテキズム443番)

イエズスは御父を示す方

すでに少年の頃、イエズスは心配して探し回っていたマリアとヨセフに、「私が父の家にいるはずだと知らなかったのですか」(ルカ2・48以下)と答えました。安息日に奇跡の治癒を行なったと非難するユダヤ人には、「私の父は今も働かれるのだから、私も働く」(ヨハネ5・17)と答えました。十字架の上から御父に、死刑執行者たちを赦してくださいるよう、また自分の霊を受けてくださるよう祈りました。(ルカ23・34、46)イ

エズスが自分との関係で認識する神の父性と、他の全ての人間との関係で認識する父性との違いは、このようなイエズスの意識に基づいています。復活の後、マグダラのマリアに向かって言われた言葉の中に、それが強調されています。「私を引き止めるな、私はまだ父のもとに昇っていないからだ。兄弟たちのところに行き、〈私の父またあなたたちの父、私の神またあなたたちの神のもとに私は昇る〉と言いなさい。」(ヨハネ20・17)

3 御父とイエズスの関係は独特です。御父がいつでも聞き入れてくださること、人間が疑って確証を求める時でさえ、自分を通して栄光を表わされることをイエズスは知っていました。ラザロの復活のエピソードにこれらのことが見て取れます。「石は取りのけられた。イエズスは目を上げて話された。『父よ、私の願いを聞き入れてくださったことを感謝いたします。私はあなたがつねに私の願いを聞き入れてくださることをよく知っています。わたしがこう言うのは、この周りにいる人々のため、あなたが私を遣わされたことをこの人たちに信じさせるためであります。』」(ヨハネ11・41以下)このような独自の理解のおかげで、イエズスは御父を啓示する者としての自分を示すことができました。その知識は密接で神秘的な相互関係の実りであり、イエズスが喜びに満ちて讃えたように、「全てのものは父から私に任されました。子が何者かを知っているのは父のほかになく、父が何者かを知っているのは子と子が示しを与えた人のほかにありません。」(マテオ11・27)(カトリック教会のカテキズム240番参照)一方、御父は、御子との独特のきずなを「愛する」子という呼びかけで表わしておられます。ヨルダン川での洗礼(マルコ1・11参照)やご変容の場面(マルコ9・7参照)に見られる通りです。さらにイエズスが特別な意味で息子として描かれているのは、悪い小作人たちのたとえ話です。彼らはぶどう畑の収穫の分け前を受け取るために送られた二人の召使いと、続いて送られた畑の主人の「愛する子」をあしざまに扱ったと書かれています。(マルコ12・1～11、特に6の部分)

4 マルコの福音は、「アッパ」というアラム語の言葉を伝えています。(マルコ14・36参照) ゲッセマニで苦しむイエズスが、神を呼び求め、受難の杯を取り去ってくださいと祈った時の呼びかけの言葉です。マテオ福音書の同じ場面(26・39、同42参照)では「私の父よ」と訳され、ルカでは簡潔に「父よ」(22・42参照)となっています。アラム語のこの言葉は、今の言葉に直せば「お父さん」とか「パパ」になるでしょうが、子供の優しい愛情を表現しています。神への呼びかけに用いたのはイエズスが初めてですが、それは十字架上でまさに終わろうとしている生涯の成就のうちに、最期の瞬間にも自分と御父とを結びつけている密接なきずなを示すのに使われました。「アッパ」の一語は、イエズスと父なる神とのきわめて深い親しさ、聖書にも聖書以外にも宗教上先例のない親密さを示しています。この御父の独り子イエズスの死と復活を通して、聖パウロによれば私たちもまた、子としての尊厳にまで高められ、「アッパ、父よ」と叫ぶよう促してくださいる聖霊を受けました。(ローマ8・15、ガラツィア4・6参照) イエズスの時代に全ての人の間で日常使われていた子供のように単純なこの表現は、イエズスおよびその弟子たちとの関係における神の独特の父性を表わす、とても重要な教義上の意味を獲得することになりました。

私たちと御父の関係は、キリストへの忠誠しだい

5 御父とはこれほどにも親密なきずなで結ばれていることを感じながらも、イエズスは最終的な御国の到来の時を知らないことを認めていました。「その日その時を知る者は一人もいない。天にいる使いたちも子も知らぬ。ただ父だけが知られる。」(マテオ24・36) これは託身にふさわしく、「自分を無にしている」ことの現われでした。この世の終わりは、人間としてのイエズスには隠されていました。こうしてイエズスは人間の思い通りには進まないことを示し、私たちが常に気をつけているよう、御父の摂理に信頼するようさとすのです。でも、福音書によれば、知らないからといって「子」としての親密さと絶対性が損なわれはしません。逆にイエズスがこれほどまでも私たちと一致していることで、御父の前で決定的な役割を果たすことができるのです。「人々の前で私の味方だと宣言する者を、私もまた天にいます父の前で味方だと宣言しよう。人々の前で私を否む者を、私もまた天にいます父の前で否む。」(マテオ10・32以下) 御父の前でイエズスに認めてほしいなら、人々の前でイエズスを認めることが必要です。言い換えれば、天の御父の子としてのきずなは、私たちが「父の愛する御子」イエズスに対して勇敢に忠誠を保つかどうかにかかっているのです。(1999・3・3)

ミサは司祭の生活の中心

〈ローマ大神学校の神学生たちを迎えて〉

▲ (…) いけにえである聖体は、教会生命の源であり頂点であると同時に、私たち一人ひとりの聖化の旅路の源・頂点でもあります。(教会憲章11番参照) 先日、私たちはラテラノ聖堂で主の体の大祝日を祝い、伝統行事である聖マリア・マジョーレ聖堂への聖体行列を行ないました。今日、私たちはこの同じ秘義を、司祭たちの御母のあわれみ深いまごしのもと、祝おうとしています。

▲ 親愛なる兄弟の皆さん。祝された処女は全ての人をキリストのもとへ行かせたいと願っておられます。そのためには、聖体の聖なる役務者たちによる寛大な奉仕が必要です。聖母はそれをご存じですから、司祭の叙階を受けた日から日々主との出会いを完成させる場となるあの祭壇を皆さんに指し示すのです。実際、司祭がキリストとの一致を学んでゆくのは何よりもミサ聖祭の時なのです。

「私は…キリストとともに十字架につけられた。私は生きていたが、もう私ではなく、キリストが私のうちに生きていたものである。」(ガラツィア2・19~20) パウロのこの言葉は聖体拝領の実存的な成果を示してい

ます。つまり、聖霊の力によってキリストが靈魂に内在されることです。司祭以上にパウロの言葉を自分自身のものとし、それを生活の中で実現するよう期待される者がいるでしょうか。

▲ まことにミサは司祭生活の中心、司祭の日々の中心です。この中心性が、神学校での形成プログラムの一番大切な目的です。それには司祭志願者各自の自覚と、全面協力が求められます。まず、聖体を熱烈に愛することです。召命ゆえに、司祭志願者は最も個人的な呼びかけの意味を悟ることができるほどに強く深く、ミサの犠牲にあずからなければなりません。「私の記念としてこれを行なえ」という言葉が心の奥へ雄弁に語りかけます。志願者は聖体がキリストの恩寵の生きた秘跡であることに気づき、聖体と引き換えに差し出せるものは自分自身の他にないと感じます。

このような愛と信仰に満ちた応答が若者の心に育つとき、教会は喜び、マリアの心も喜びにあふれます。聖母は母親らしい気遣いで、各人の召命が実るよう期待し、見守っておられたのです。「信ずべき御母」と呼びかけて祈れば、聖母は皆さん一人ひとりに目を注いで

くださるでしょう。このミサの中で、私は皆さんのために祈ります。聖なる司祭となられますように。皆さんの上長と先生方のためにも祈ります。この道で、皆さんの案内者となられますように。皆さんの親族の方々のためにも祈ります。マリアが御子イエズスに対してそうだったように、つつましく心配げに皆さんの歩みを見守っている人々です。

▲ 無原罪の聖母を通して、皆さんがいつも神を見つめ、皆さんに先回りする神の無償の愛と進んでお与えになる恩寵への鋭い感覚を持ち続けることができますように。愛と恩寵には寛大な応答こそふさわしいでしょう。救い主イエズスへの感謝と愛をはばか

りなく表わした、あの罪の女のように。こうして皆さんは、常にあわれみ深い神の愛を確信する証人となるでしょう。神の愛は終わりなき改心と赦しの泉です。司祭となるからには、皆さんも和解の秘跡(赦しの秘跡)の熱心な役務者となってください。

聖霊は皆さんの心の奥深くで働いて、いま述べたことを全て成し遂げてくださいます。司祭としてのキリストの心を、マリアの体内から十字架上で最後の犠牲と復活という生涯の完成に至るまで形作ってきた聖霊が、皆さんの心をも魂の救いと神の栄光のために、善き牧者キリストのように形作ってくださることを願っています。アーメン！ (1998・6・14)

教皇さまの動き

●6・2 水曜日の一般謁見で、く死は御父との出会いをテーマにお話しになった。「現代は死について語りにくい状況にあります。豊かな社会は死という現実について考えたがらないからです。」「神秘体の一員である信者にとって死は御父への道を拓きます。一度は死を経験しなければなりません、朽ちるものが朽ちないものを、死すべきものが不死のものをまとう時、私たちは必ず御父と出会います。」

●6・3 夕方7時、教皇さまはラテラノ聖ヨハネ大聖堂前の広場でキリストの聖体のミサをあげ、聖マリア・マジョーレ聖堂まで恒例の聖体行列を行なわれた。「ミサも聖体行列も、心からの平和への願いです。私たちは心を合わせて平和を祈り求めます。」「神が約束された平和を得るためには、過去の経験を忘れ去るのではなく心に銘記する必要があります。今世紀、人類にどれほどの苦難が降りかかったか、忘れることはできません。神よ、自分と先祖の経験から正しく学び取ることができるようお助けください。」

●6・4 教皇庁家庭評議会の年次総会参加者を迎えてのお話。「富んだ国々では、親になることへのためらいと、両親が自分を与え尽くすといった環境の元で子供たちが生まれる権利を無視する風潮が広がっています。多くの方が親としての役目を放棄し、子供たちの単なる友人になろうとします。子供の教育こそ両親の聖なる義務であることを強調すべきです。」

同日、教皇さまからキリスト教一致推進評議会議長キャンディ枢機卿に当てた手紙が公表された。教皇さ

まはバルカンでの紛争のため、今月予定されていたカトリック教会と正教会の神学的対話のための国際委員会が開催できなくなったことについて述べた後、キリスト教三千年期を迎える今、新たな熱意で教会一致運動を進めていかなければならないと述べられた。

●6・6 5日からポーランドを訪れている教皇さまは「司教の山」と呼ばれる所でミサを捧げられた。「幸いなのは神の言葉を聞いてそれを守る人。福音の書物を手に、新しい千年期を迎えよう！福音を読み、黙想し、キリストに耳を傾けましょう！」「教会の長い信仰の伝統から離れ、現代の文化やジャーナリズムの解釈法に従って聖書を読み解く誘惑があります。これは啓示された真理を過度に単純化したり歪めたり、果ては個人主義的な人生哲学やイデオロギーの要求に真理を合わせてしまう危険につながります。」「啓示を説く任に当たる人は、誤りやすい自らの直観ではなく正統的な知識と確固たる信仰に信を置くべきです。」

同日夕方、イエズスの至聖なるみ心の礼拝を司式した教皇さまは「神なしの世界、神の命令と福音を排除した生活という誘惑が私たちを脅かしています。神なき世界は、ついには人間自身に反する世界となってしまおうでしょう。」「罪は神の愛に背き、神に背を向けさせます。とんでもないことです。…私たちは常に、罪の中にある死の種に目を光らせていなければなりません。祈りと秘跡に助けられ、神との一致を心がけるにつれて、罪の感覚も鋭くなります。神の法を愛し、法に従って生きることを望む者となりましょう。」

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
 ■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)
 詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448
 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

感情が支配するとき： 「気持ち」を優先する社会の落とし穴

社会生活に新しい要素が定着しつつある。それは、多くの指導者が「見せかけの政治」を手段としていることによく表われており、また健康、教育、環境などの分野にも影響を与えている。それは感情が思考に取って代わったことであり、「感情的に正しければ良い」という考え方の勝利だったのである。

ダイアナ妃の死を巡る人々の悲しみようを見て、マスコミは仰天した。イギリスに限らず、世間の反応は、感情の公然の勝利を映し出していた。何千もの人が列を作り、弔問名簿にサインするために8時間でも待つ覚悟でいるとは、誰も予想していなかった。従来と明らかに違う、何か新たな特別の感情があるというわけではない。新しい現象は、大衆の表現の仕方にある。感傷的な一面記事で明らかになったのは、一人の若くて美しい、その上「理解されなかった」王妃の悲劇的な死を悲しむこと以上に、感傷主義が一つの社会現象になったことである。

ダイアナ妃の死と彼女の思い出を巡ってあらわになったこの新しい現象は、現代社会が文化と学問と理性の社会であると考えていた人々に、思いもよらない衝撃を与えた。ある学者は「感傷主義は、理性と現実の認識に先立ち、社会の動きの案内人になりつつあることが今わかった」と言う。

苦勞のない目標

イギリスのシンク・タンクが出版したある本は、感情に支配される社会の特徴を扱っている。それによると、感傷主義は浅薄と同義であり、虚像の勝利である。感傷的な人は目標達成に必要な労苦を避けるので、それは努力を伴わない手ごろな見せかけのコピーでしかない。それはすでに生活の多くの分野に表われている。

感傷的な人は、人々の応じ方を気にも留めず、プログラムや計画を信用しきってしまう。「生活上のいやなことや悲劇を取り除くには、自分自身を変えるのではなく周囲を変えることである、と感傷主義者は主張する。この考え方によると、全ての悪は組織や制度の欠陥に原因することになる。」さらに、感傷的な人は人間の本性が原罪によって悪に傾いていることを否定する、ベラギウスの異端説を引きずっているのである。

見せかけの政治

従来、政治や文化の大きな方向転換は人々の関心や考え方が変化した結果として説明されてきた。しかし今日の社会では人々の感情に左右される傾向がますます広がっていくようだ。信念や個人的責任を伴う意味

ある感情ではなく、単に気持ちを表わすことであり、大衆の感情の表現なのである。そこには実際に人々が抱いていない感情まで含まれてしまう。

あからさまに認めてはいないが、多くの政治家が最も気にしているのは、良い印象を与えることである。彼らはコンサルタントや意識調査の助けを借りて、良いイメージを与えるよう振舞いを改める。これが「ご機嫌取りの政治」である。「実りある政治」ではない。政治家の関心は決定した政策が良いかどうかを確認することではなく、その政策に対する国民の気持ちをすることだと言える。合衆国の大統領は出産間近になってからの墮胎に道を開く決定をし、「その手術のおかげで生きている5人の女性」を伴って発表を行なった。

これが見せかけの政治である。つまり一番重要なのは、心の琴線に触れる「適切なサイン」(たとえ後に別のことになろうと)を社会に送ることである。しかし、そのような政治は普遍的な価値を持たず、現在生きている社会の行き方に応えるものに過ぎないことを忘れてはならない。

現実を感じる

全てがオン・ラインにある(互いにつながり影響しあう)社会で、マス・メディアは膨大な量の感傷主義を絶えず送りだすふいごのような機能を果たしており、その結果、感傷主義が隅々まで行き渡っている。それはテレビのフィクション番組だけでなく、ニュースの選択やニュース番組の報道の仕方にも表われる。しばしばテレビのニュース番組は視聴者を楽ませるメロドラマに変わってしまったと言えるほどである。

また、ニュース性を強調するために、ニュースの裏にある「人間的な面」を暴くことも辞さない古くからのジャーナリズムの方針が乱用され、そのような人間的な興味が当のニュースを全面的に歪曲してしまうこともしばしばである。ついには事実を理解することではなく、事実を「感じる」ことを助長することに終始するのである。我々は事実と虚像を区別するのが難しい、生々しい映像を通じてニュースを見ている。たとえ映像自体は付随的なものであっても、事実を描写するためにテレビは映像のイメージを利用するのが常である。我々は虚像(バーチャル)で覆われた現実生きているが、これは情報技術とは何の関係もないもので、それをを用いる人間の問題である。

しつけのない愛

文化の面でも、それが良いことかどうかより、良い感情を引き出すことを重視する特徴が見られる。それ

で、「子供を中心に置いた」学校では、生徒に対してごくわずかの教育としつけしか施していないのに、子供を愛することについて多く語るという逆説が生じている。そこでは、子供は意のままに行動する純真無垢の存在であり、大人は子供と遊んでやり、子供に寛大でなければならぬと考えられている。ところが、子供は悪いことをする可能性があるゆえに、判断と規律を身に付ける必要のあることが忘れ去られている。

この態度はセンチメンタルと呼ばれているが、環境問題のように一見非常に技術的な面にも現われている。つまり関心の的は環境や動物に対して優しいことであり、汚染されていない自然の牧歌的な風景がもてはやされ、人間の有害な行為は批判される。人間の営みが生み出す悪影響を改めるよう求める一方で、進歩、発展、自然界のコントロールがもたらした快適さを捨てようとはしない。生活環境について不安を抱き、誰かがイニシアチブを取ってくれることを期待しながら、一方ではできるなら自分ではなく、他人がその代償を支払うことを望んでいる。

健康に対する強迫観念

健康に対する現代の強迫観念にもかなり感傷的傾向が見られる。現代ほど病気の危険が取り除かれ、これまでになく良い生活をしている時代はないにも関わらず、健康を害する恐れがあれば、どんな些細なことにも気をもみ、強迫観念に取りつかれる。医療が科学、つまり「事実」によってかつてないほど保証されている時代に、我々は気に入らない処方箋から逃げ出し、自分を満足させる「代替物」の診断を探す。医療分野の感傷主義のもう一つの表われは、健康に関するあらゆる問題に対処するため必要な資金が割り当てられ、努力が払われれば必ず解決策があると信じていることである。

「分かち合い」の宗教

宗教の分野でも現実を必死になって見せかけに合わせようとしている、と著者は言う。それは感傷主義を定義づける特徴の一つである。この場合、最終的な現実である神を、我々にとって都合が良いと感じられるイメージに合わせようと望む。つまり、我々に不快を与えるような規律と道徳的規範はなきものにしようとする。「宗教的観点からすると、我々の望みは優しい神に抱かれ、「分かち合う」という快い体験である。伝統的な信仰において重視された古い規範は全く受け付けない。カルワリオ（十字架）のないベツレヘム（馬小屋）なのだ。」宗教から教義も伝統も規律も無くしてしまえば、残るのは快い感情だけである。ロマン主義の時代から、人が宗教の掟を捨てるなら、道徳指標の源として感情に信頼を置くことになると証明されていた。感傷主義の風潮が、信仰のない教会、教育のない

学校を作り出す。このような社会で、本来なら要求される責任や努力なしに、人々の快適のみを目指す偽りの政治があっても驚くにあたらない。少数派のための「もっともな活動」や社会福祉に対する考え方がこれである。それらは当事者の責任や努力の痛みと覚悟を要求せず、人々の快適さのみを望む政策である。

危険な逃避

この本の著者たちはかなり無理な考察をしている箇所がある。おそらく別の要因から説明できそうな社会現象をおおげさにして、感傷主義的風潮に含めて考えているからだろう。著者はカトリック教会について、あまりに単純化している。教会は制度の根本を失いつつあり、教えは空洞化し、単に「分かち合う」だけの状態になっていると言うが、ある程度広まってしまった誤謬と、教皇および聖座によって決定された方針との区別をしていないのだ。いずれにせよ、この本の独創性は感傷主義の諸現象を詳しく分析することにあるのではなく、それが現代社会にまんえんしているという、痛い点をついた所にある。

この感傷主義の流れは大変なことになるかという質問に対して著者は答えている。「そうです。それは全くの逃避であり、現実を見せかけに、実態を希望に、節度を自己満足に取り違え、個人の責任を犠牲と受け取るようになるからです。理性と文明を重視する人は皆、危機感を持つべきです。90年代のロンドンの大衆の痛みは、70年代のパリの大衆の騒動よりもっと悪い結果になるかもしれません。」

説明だけでは不十分な時代

今や論理的な説明だけでは不十分である。理路整然と詳しく解説しても話にならない。心に訴えることが必要なのだ。証しを伴って伝わる説得である。ただし、証しが一貫して、正真正銘で、信じられるものでなければ効果がない。だから一般大衆の前で行なうむなし見せかけの政治をまねることは問題外である。

専門家によれば、ヨハネ・パウロ二世が人々に訴えかける力の理由の一つはこれである。教皇の態度は、入念に準備されたものではない。現代社会は説教家よりも証人を評価し、一つの演説よりも一つの業の方が十倍優れていると歓迎する。数ある例の中でも教皇が刑務所にアリ・ハッカ（教皇狙撃犯）を訪ねたことを挙げられる。これは、回勅『慈しみ深い神』よりもはるかに世論に直接影響を与えた。回勅も同じテーマ『赦し』を示すものだったが、自分を殺そうとした人間に対する教皇の抱擁は、じかに人々の心に訴えたのだ。今日では、二つのことを考慮に入れるべきであろう。すなわち理論的説明と、心に訴えることである。

（「アセプレンサ」98年9月23日号から）